

# IGF2023 参加報告書

慶應義塾大学 大谷 亘

October 25, 2023

## 1 概要

本稿では、JPNIC による国際会議参加支援プログラムを利用して Internet Governance Forum 2023 (日本・京都) に参加した件について、「参加セッションと概要」「参加した所感」「今後の展望」の 3 点にわけて報告する。IGF2023 では開催 5 日間全日を通してセッションに参加したり、セッション外のアクティビティに参加したりした。今後は学んだことを所属コミュニティに持ち帰り、築いたネットワークを有効に活用していきたい。

## 2 参加セッションと概要

本会議においては、以下のセッションに参加した。

- Hack the Digital Divides
- Building Capacity in Cyber Security
- Can a Layered Approach Stop Internet Fragmentation?
- DC-DNSI Closing the Governance Gaps: New Paradigms for a Safer DNS
- Manga Culture & Internet Governance–The Fight Against Piracy
- What is the nature of the internet? Different Approaches
- YCIG Advancing Youth Participation in IG: results from case study
- Internet Engineering Task Force Open Forum
- Book presentation: “Youth Atlas (Second edition)”
- Open Mic – Taking Stock
- Closing Ceremony

以下、この中で特に注目したセッションについて概要を記す。

## 2.1 Can a Layered Approach Stop Internet Fragmentation?

本セッションでは、インターネットの技術スタックのモデルとしてよく用いられる OSI 参照モデルのような階層アプローチをインターネットガバナンスにも適用することでインターネットの断片化を防げる可能性を模索した。議論の結果、このようなアプローチはガバナンスにおいても有効であり、特に最上層で公共ポリシーを設計・実施することが効果的であることが指摘された。また、マルチステークホルダの観点から、下層のインフラ層で規制を実施すべきでないことも挙げられた。これは、インフラ層で規制を実施すると、本当に規制が必要な場所以外にも影響が出てしまい副作用が発生する懸念があるからである。最後に、インターネットの断片化を引き起こす有害な事象に対して、ポリシーメーカーが効果的な規制のための原則を集合的に議論・確立すべきであると呼びかけられた。インターネット上での規制と説明責任は上層である「インターネットの公共の核」に焦点を当てるべきだとされた。

## 2.2 Manga Culture & Internet Governance-The Fight Against Piracy

本セッションにおいては、インターネットの技術者や海賊版によって実際に被害を受けているマンガ作者らなど多様なステークホルダがパネルとして登壇し議論が行われた。パネルには主に日本でマンガ海賊版の問題に取り組む人々が登壇したものの、会場からは海外の目線で海賊版が海外で与えているポジティブな影響についても多くの議論があったことは特筆すべきである。議論ではまず、現在海賊版の問題は既に日本のマンガ作者だけの問題ではなく、多くの人々によって問題への認識が共有されていることが確認された。その上で、会場から「正規版では自分の言語がサポートされていないため翻訳済の海賊版を読むしかなかったが、それが自分の人生に大きな良い影響を与えた」という若者の声があった。つまり、マンガは実際に海外においても人々の生活や人生のあり方に大きな衝撃を与える作品であることは事実だが、それを正規の手法で入手できない人たちが仕方なく海賊版に頼っている現状があるということである。この点、現在では出版社は紙媒体にこだわらず英語などに翻訳されたマンガをオンラインプラットフォームで有料で配信しているが、多言語対応が不十分であるという指摘だとして受け止められ、正規版での他言語サポートが積極的に推進されるべきだとされた。

## 2.3 Internet Engineering Task Force Open Forum

本セッションでは、主に Technical Community でないステークホルダに向けて、IETF がどのような組織でどのような活動をしており、インターネットを運用する上でどのような役割を果たしているのかが説明された。冒頭では、IETF はオープン、ボトムアップ、ラフコンセンサスの精神に則りインターネット標準の開発を行っている技術コミュニティであること、参加している個人はそれぞれの意思で互いに協力しインターネット技術を進化させ続けていることが紹介された。また、多様性は IETF の中でも重要なテーマとして捉えられており、ミーティング参加者の多様性は増加し続けていること、新人・マイノリティ・ポリシメーカなど参加障壁があるかもしれない人にも参加してもらいやすい環境作りと具体的な活動を行っていることも説明された。会場との議論の後、技術コミュニティは様々なアウトリーチなどを通して IETF が定めるオープンスタンダード策定プロセスへのマルチステークホルダの参加をさらに促進させるべきであること、技術コミュニティは IGF をはじめとするマルチステークホルダフォーラムでのエンゲージメントを増やすべきであることが確認された。セッションの中で個人的には、日本の地方自治体の行政担当者から実際に IETF のプロトコルを利用して困ったことがあり、そのような事態に IETF はどのように対処しているのかなど、技術そのものやプロトコル策定プロセスに対する興味を示していることに注目した。

## 3 参加した所感

セッションに限らず本プログラム全体を通じた所感を記す。

### 3.1 他会議との違い

私はこれまで IGF に限らず、ICANN や RIR, IETF などインターネットガバナンスやプロトコル策定に関わる会議に複数出席しており、うちいくつかのオンサイト参加では JPNIC 国際会議参加支援プログラムによる支援を受けて出席している。それらの経験から、どの会議も三者三様であるが、IGF は特に「意思決定の場ではなく対話のためのプラットフォームである」ということを強く実感した。他の会議では自分がコンセンサスメイキングに関わるステークホルダの一人であるという意識で参加していたが、今回はそれよりも「ある問題に対して他のステークホルダがどのような観点を持っているのかを学ぶ場である」という意識で参加した。また、インターネットコミュニティを起源とせず国連が主催しているフォーラムということもあり、マルチステークホルダは掲げているものの、インターネットコミュニティでの会議に慣れた身としてはトップダウンを前提とした対話が多いように感じられた。マルチステークホルダを目指す IGF に今後より積極的に参加・貢献する

ためには、まずこの文化の違いを認識し、その上で非政府である Technical Community としてどのように他のステークホルダにアプローチするかをより一層準備してから参加する必要があるだろう。

### 3.2 海外の Youth との交流

今回私は Internet Society Youth Standing Group が主催するサイドイベント・ソーシャルについて、ホスト国側の人間として実行委員に加わった。その関連もあり、多くの海外の Youth と知り合い、議論を持つことができた。IGF に対する Youth engagement そのものへの問題意識から参加している方が多かったが、中にはガバナンスを主眼としている方だけではなく本業ではエンジニアをやっているような方もおり、様々な問題について個別に議論することができたと思う。IGF はセッションの多さから休憩時間が一斉ではなく、セッションを終えて外に出たりブースエリアを歩いていたりすると様々な人と出会い、そこで時間をかけて、時にはセッションへの参加よりも実りが多いと感じる議論をすることができ、ネットワーキングと実践的なコミュニケーション・対話においてとても有意義な時間になったと感じた。

## 4 今後の展望

今後の展望として、まずは IGF にてどのようなことができるのか・得られるのかを持ち帰り、本報告書をもととして自分のいるコミュニティにて報告したい。IGF は特に Technical Community の色が薄くなりがちな会議ではあるが、その中でこれまで非政府でインターネットの運用を引っ張ってきた Technical Community がどのようにプレゼンスを出し、インターネット上でのガバナンスに対する貢献ができるのかを真剣に議論する必要があると考える。最後に、この機会を得たネットワークについて、インターネットガバナンスの視点ではもちろん、普段の学業などでも有効活用し、継続的に広げていけるよう密に連絡を取り合っていきたい。

謝辞 現地でサポートしてくださった JPNIC の前村昌紀氏、山崎信氏、根津智子氏、プログラムを調整いただいたフェロシッププログラム事務局の皆様、一緒に議論してくださったフェローの皆様、本プログラムにご協賛いただいた皆様、実行委員として協力させていただいた Internet Society Youth Standing Group の皆様、その他現地にて貴重な意見交換や議論をしてくださった皆様に感謝申し上げます。